

AIを用いた楽曲制作に関する検討

1532117 秋場 翼

1532151 松元 孝樹

指導教員：中村 直人 教授

平成31年度

目次

第1章	序論	1
1.1	研究の背景と目的	1
1.2	本論文の構成	1
第2章	理論	2
2.1	AIを用いた楽曲作成	2
2.1.1	MIDI	2
2.1.2	Magenta	2
2.2	開発環境の構築	3
第3章	楽曲制作	4
3.1	NoteSequenceの作成	4
3.1.1	学習の開始	5
3.1.2	音楽データの作成	5
3.2	PolyfonyRNN	5
第4章	結論	6
4.1	今後の課題	7
	謝辞	8
	参考文献	9

目 次

2.1	magenta による MIDI 音楽データ生成までのプロセス	3
3.1	NoteSequence の作成	4
3.2	NoteSequence を学習用と評価表に分割	4
3.3	BasicRNN を使用した学習の開始	5
3.4	学習モデルを使用し,10 曲を作成	5

表 目 次

第1章 序論

1.1 研究の背景と目的

近年，AI 分野は急速な発展を続けている．スマートスピーカなどの対話型の AI が Google や Amazon によって商品化され，現在ではスマートフォンにも搭載されるなどその存在は非常に身近になっており，その種類も非常に多岐にわたる．

また囲碁や将棋などの競技においても，プロに勝利するなどその精度は高くなっており，その成長は著しい．芸術の分野ではまだ発展途上ではあるが，絵画や音楽に関しても AI を用いて新しい作品を作るものが出回っている．

このように AI の発展は様々な分野においてその成果を上げており，今後は業務の効率化や補助だけにとどまらず，自動車の自動運転や医療の現場でも人間の手よりも高精度なものとして活躍することが期待されている．

本研究では AI による楽曲生成についての実証実験を行う．Googole brain によって公開されている Magenta を用いて学習データやノード数による楽曲の生成結果の違いを比較，検証し，AI による楽曲制作が有用なものか調査する．

1.2 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである．

第1章では本論文の背景と目的について述べている．

第2章では本論文で利用する理論について述べている．

第3章では実験内容について述べている．

第4章では楽曲制作について述べている．

第5章では AI を用いた楽曲制作についての本研究の結論について述べている．

第2章 理論

2.1 AIを用いた楽曲作成

2.1.1 MIDI

AIによる曲制作では主に MIDI ファイルの音楽データを使用する。MIDI ファイルには実際の音ではなく音楽の演奏情報（音の高さや長さなど）である。本研究で用いる AI はこの MIDI ファイルの情報を元に学習をする。また入出力の際もこの規格を用いる。

2.1.2 Magenta

本研究では Magenta[1] を使用する。これは音楽などを TensorFlow を使って機械学習するライブラリであり、Google Brain が GitHub 上に公開している。Magenta ではまず学習させたい音楽の MIDI データをファイルに格納し NoteSequence（magenta が扱うファイル形式）に変更する。それを学習用データセットに変換したあと学習を行う。このとき、一度に学習させるデータの数、学習を行う回数、ノード数を設定する。これをパッケージ化し、MIDI ファイルとして新たに楽曲を生成するという流れである。これを図 2.1 に示す。

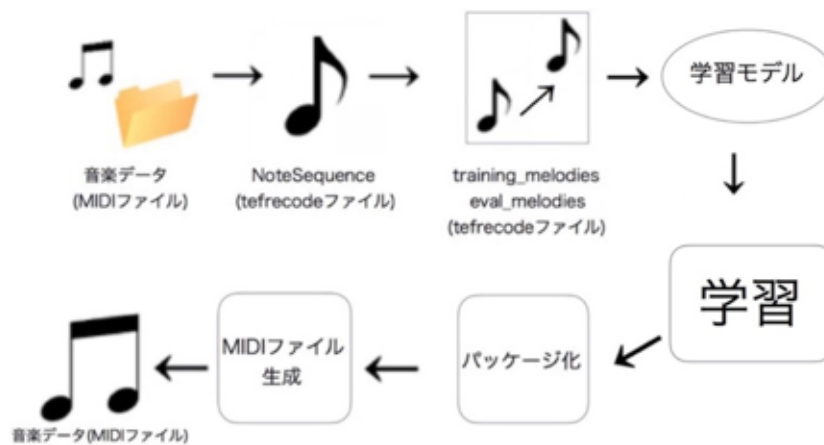


図 2.1: magenta による MIDI 音楽データ生成までのプロセス

2.2 開発環境の構築

開発環境の構築にはコンテナ型仮想環境を提供するオープンソフトウェアである Docker を用いた。

Docker には仮想環境を配布可能な形にする事ができる DockerImage があり、その Image を用いる事で同一の実行環境が作成できる。また、クラウド上で DockerImage を配布できる DockerHub というサービスがあり、そのサービス上にすでに Magenta の開発環境を構築済みの仮想環境があるため、その環境を今回は利用した。

第3章 楽曲制作

3.1 NoteSequence の作成

NoteSequence とは MIDI データから作成されるプロトコルバッファである。プロトコルバッファとは Google は 2008 年にオープンソース化したスキーマ言語であり, スキーマ言語とは, Magenta は Python で作成されているので, 実行するには Python ファイルを指定し実行するか, NoteSequence の作成は図のコマンドで作成できる。

```
root@2e6500d0c5d2:/magenta-data# convert_dir_to_note_sequences \  
> --input_dir=/magenta-data/basemelody \  
> --output_file=/tmp/notesequences.tfrecord \  
> --recursive
```

図 3.1: NoteSequence の作成

`--input_dir` で学習させる MIDI データの 絶対パスを指定し, `--output_file` で NoteSequence の出力先のディレクトリを指定する。

次に作成した NoteSequence のデータセットを学習用と評価用に分割するために, 下記のコマンドを実行する。

```
root@2e6500d0c5d2:/magenta-data# melody_rnn_create_dataset \  
> --config=basic_rnn \  
> --input=/tmp/notesequences.tfrecord \  
> --output_dir=/tmp/melody_rnn/sequence_examples \  
> --eval_ratio=0.10
```

図 3.2: NoteSequence を学習用と評価表に分割

`--config` で使用する RNN を指定する。`--eval_ratio` で NoteSequence の 10 % が評価のためのデータになり, 残りの 90 % が学習用のデータになる。

3.1.1 学習の開始

```
root@2e6500d0c5d2:/magenta-data# melody_rnn_train \  
> --config=basic_rnn \  
> --run_dir=/tmp/melody_rnn/logdir/run1 \  
> --sequence_example_file=/tmp/melody_rnn/sequence_examples/training_melodies.tfrecord \  
> --hparams="batch_size=64,rnn_layer_sizes=[64,64]" \  
> --num_training_steps=500
```

図 3.3: BasicRNN を使用した学習の開始

`--config` で学習に使用する学習モデルを指定, `--run_dir` で, `--sequence_example_file` で学習のために用意した `NotesSequence` を指定する. `--hparams` でメモリの使用量を指定し, `--rnn_layer_size` で中間層のノード数を指定し, `--num_training_steps` で学習回数を設定する.

3.1.2 音楽データの作成

下図のコマンドで

```
root@2e6500d0c5d2:/magenta-data# melody_rnn_generate \  
> --config=attention_rnn \  
> --run_dir=/tmp/melody_rnn/logdir/run1 \  
> --output_dir=/tmp/melody_rnn/generated \  
> --num_outputs=10 \  
> --num_steps=128 \  
> --hparams="batch_size=64,rnn_layer_sizes=[64,64]" \  
> --primer_melody="[60]"
```

図 3.4: 学習モデルを使用し,10 曲を作成

3.2 PolyphonyRNN

第4章 結論

4.1 今後の課題

aaa

謝辭

参考文献

[1]